

写真説明：安芸クイーン



## ●●● 現地報告

### 米国：CA州で栽培されたデコポンが米国市場に初登場

中川 圭子

カリフォルニア州で栽培されたデコポンが、2011年に初めて米国市場に登場した。デコポンの米国市場における登録商標は「スモウシトラス(Sumo Citrus)」である。力士のように特大サイズであることから、このように命名されたらしい。「糖度が高く、風味が良く、種なし、多果汁で、皮が剥きやすく、じょうのう膜が薄く、手を汚さずに食べられる簡便さ」等々のキャッチフレーズで販売された。

デコポンが米国へ導入された経緯は明らかではない。2月17日付けのロサンゼルスタイムズ紙によると、1990年代にセントラルバ

レー内の1生産者によって穂木が輸入され、この生産者の自費による米国農務省植物防疫所における数年間にわたる除菌やその他の必要試験を経て栽植に至ったという。米国は、現在、植物防疫上の理由から生鮮デコポンの米国内への持ち込みを禁止している。

収穫初年であった本年産スモウシトラスの販売量はわずかな数量に止まり、販売店舗もカリフォルニア州内の一部のアジア系スーパー等に限定された。この限定販売商品を購入した食品担当記者によれば、前評判どおりの抜群の食味であったという。この記者によって紹介さ

れた1ポンド(453g)当たりの初売り小売価格は2.99ドル(1ドル=80円換算で100gあたり53円)であった。

州内で販売される他のカンキツ類と比較すると高値であるものの、庶民でもなんとか手が届く価格帯におさまっている。

クレメンティンに代表されるミカン類は、現在、米国で顕著な消費拡大が認められる唯一のカンキツ類である。米国でミカン人気が高まっている主要因は、一般に種がなく、甘みが強く、ナイフを使う必要のない、手軽に皮が剥ける簡便性である。これらミカン類の中でもとびきり美味しいとされるスモウシトラスの今後の消費拡大が期待されている。

## - 目次 -

### 現地報告

米国	1
フランス	1
ブラジル	2
タイ	2
豪州	3

### 果樹産業の動向

・中国におけるアウトウの生産状況	3
・将来のリンゴ生産および消費の野火を考慮した長期的輸出戦略	4
・世界のリンゴ、ブドウおよびナシの需給	5

### トピックス

・中国の2000~2010年までのリンゴの年間平均輸出価格	8
-------------------------------	---

### フランス：青果物取引の契約文書の義務化

佐川 みか

フランスでは、生産物の払戻金をめぐる量販店の商習慣をめぐって、5つの仕入れセンターに集約される量販店グループと農業生産者との関係が悪化していた。問題の発端は、量販店グループが当初に約束した支払額から払戻金を差し引いて生産者へ支払うため、生産者が期待する収入を得られないということであった。

青果物生産者は、小売の約70%を占める量販店との取引が中断されることを恐れて、払戻金を承諾せざるを得ないのが現状である。

払戻金とは、①出荷量に応じた単価の引き下げ、②買取業者の何らかのサービス提供(チラシに商品を掲載など)の手数料、③出荷の遅れや品質、サービス面で生産者に落ち度があった場合の値引き等のことである。

こうした商習慣を禁止する農業・漁業近代化法が、昨年7月に国会で可決され、12月にデクレ(政令)が公表された。

その内容は、生鮮青果物を生産者から買い取る業者(生産者組合、出荷業者、卸業者、量販店、小売店など)

は、遅くとも2011年3月1日までに、生産者に取引契約書を提示しなければならず、契約期間は青果物の種類に関わらず3年とする、というものである。契約には次の事項を記す。

①取引の対象となる青果物の量と特徴、マージンの上下の幅(契約は生産の季節性を考慮して、生産年度はいくつかの期間に区切って扱うことができる)。

②収穫および出荷の方法、商品へのアクセス条件、商品の出荷、引取り、または配達の内容を買い手側と売り手側それ



それぞれについて明確にする。

③価格決定の方法(それに使用する指数を明記する)。

④請求と支払の方法。

⑤契約の見直し条件(不可抗力の出来事の可能性を考慮する)。

⑥契約解除の方法(契約解除の事前通知は遅くとも解除の4ヵ月前に出さなければならない)。

これに対して、青果物の卸売業者団体 UNCGFL (L'Union nationale des commerces de gros en fruits et

légumes)は、この契約が買取り分すべてについて適用されることおよび契約期間が3年と長すぎることに對して、現実的でなく青果物の卸売業者の存続を危うくするとして見直しを求めている。

## ブラジル：高値で推移が予測されるオレンジの生産者価格

中田 秀信

全国カンキツ果汁輸出業者協会(CitrusBR)は、5月2日、2011/12農年のサンパウロ州とミナス・ジェライス州トリアングロ・ミネイロ地方のオレンジ生産を3億8,700万箱(40.8kg/箱)と発表した。一方、全国のオレンジ生産の約80%を占めるサンパウロ州は生育期に好天に恵まれたため、オレンジの生産量は前農年比15~25%増の3億5,000万箱と予測しており、オレンジ果汁工場は5月初めから加工処理を開始している。このように2011/12農年におけるサンパウロ州とミナス・ジェライス州トリアングロ・ミネイロ地方を合わせたオレンジ生産は、大豊作とはいえないものの、前農年に比べて増産と予測されている。

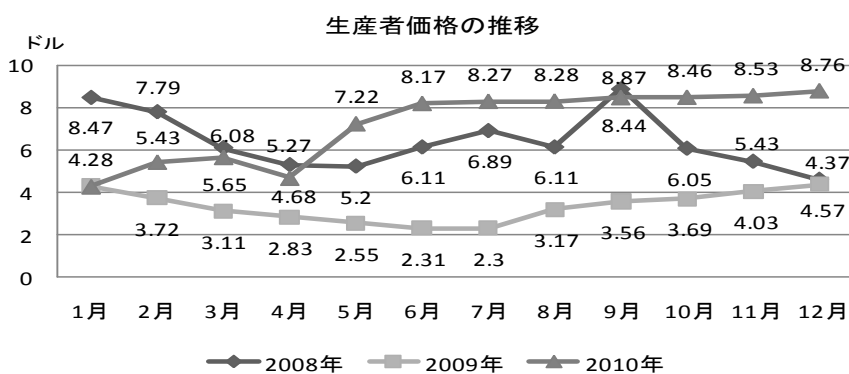
しかし、サンパウロ州のオレンジ果汁工業の2011年3月末における在庫は42万4,702トン(冷凍濃縮オレンジ果汁換算)と、2008年3月末の79万8,792トンより37万4,090トン(

46.8%減)少なく、また、前農年同期の57万4,604トンを26.1%下回っている状況から、各オレンジ果汁会社間における原料獲得競争が激しくなり、オレンジの生産者価格は前農年と同様に堅調に推移すると市場関係者はみている。

同協会のロバウエル会長によると、オレンジ果汁工場渡しのスポット価格

(当用買い)は、収穫費や工場までの輸送費が生産者負担であるが、2009年7月の2.30ドル(40.8kg/箱)を底に上昇に転じているという。

2011年1月~4月は、前年同期間の4.28ドルよりも2倍以上高い約9.00ドル台で推移しており、今後とも2010年下半期の価格を維持すると予測されている。



## タイ：パインアップル産業が直面する問題と現状

中元 進弘

「タイが世界のパインアップル輸出主導国としての地位を今後も維持するにはどうすればよいか」と題したセミナーが、2011年3月25日にカセーサート大学財団と農業雑誌「ケーハ・カセート」紙との共同で開催されたが、その中でパインアップル産業が直面する問題と現状について以下にまとめた。

タイのパインアップル産業規模は年間200億パーツであるが、現在、その規模は縮小しており、この要因として、農家による価格の高いオイルパームやパラゴムへの転作、パインアップル作付面積の減少、労働者確保の困難性に伴う労賃の上昇に加えて、パインアップル開発への関心の薄さや開発予算の減少も影響しているとしている。

このほか、水害や干ばつといった世界的気候変動がもたらす影響に伴う生産量や品質の低下、さらに西部産地に

おけるコナカイガラムシ等の病害虫発生が上げられた。

タイ・パインアップル農家協会によると、2011年に入ってパインアップルの主要生産地であるプラチュアプキリカン県では厳しい干ばつに見舞われ、30%以上のパインアップルが被害を受け、その結果、市場では供給不足となり1kg当たり例年5パーツの価格が7パーツに上昇しているという。

同協会によると、今年の市場供給量を例年より10万トン少ない190万トン程度に止まると予測している。この予測に伴い、加工工場は材料確保に奔走するため、価格は上昇し、農家が未熟のパインアップルを出荷することも予想されるため、品質の問題が懸念される。

この他、タイが現在、世界一のパインアップル輸出国であるにも関わらず、1ライ当たりの収量がかなり低く、収量の

増加が政府の喫緊の課題としている。

また、タイでは灌漑システムがあるパインアップル農場は全体のわずか30%で、これ以外の場所では雨水に頼っているため、パインアップル農場における灌漑システムの導入も課題としている。

さらに、タイのパインアップルの生産費(約3~4パーツ/kg)が、競合国のフィリピンやインドネシア(2.00~2.50パーツ/kg)に比べて高いため、政府や民間企業は協力して生産費(肥料費、労働費)などのコスト削減問題に取り組む必要があるとともに品種開発を促進することが必要であるとしている。

(注:文中の2011年5月現在の1パーツは約2.7円、1ライ=0.16ha)(2011年3月25日付け「デイリーニューズ」紙、参考「ケーハ・カセート」紙ウェブサイト内のセミナー関連記事)

## 豪州：カンキツにおける気候変動の影響

トニー・ムーディ

気候変動に伴い、カンキツ生産者はその栽培管理やマーケティングについて再考を要する。

ニューサウスウェルズ州(NSW)政府の研究者 Tahir Khurshid 博士によると、熟期が早まっていることで果皮が十分に着色せず、果実は緑色のまま果肉先行となり、このような果実を大量に抱えることになるという。

NSW 州の生育シーズン中の気温は、2020 年までに 40℃を超える日が増えると予想される。したがって、生産者は熱傷害から果実を守ることにについて多くの知見を得、慣行栽培管理法を変更するとともに、積極的な樹冠(樹形構成)の改善や遮光資材の利用とい

た栽培戦略を考慮することが必要である。

Khurshid博士の研究チームは、過去15年間にわたりワシントンネーブルオレンジの開花期調査を継続してきたが、そのデータは、この地域での春の到来が早まっていることを示している。これまでNSW州の内陸部で栽培されているワシントンネーブルオレンジの開花期は、ここ数年間の満開日は10月の初めとなっており、従来に比べ10~14日早くなっている。さらに、最新の満開日は9月22日で過去18年間で最も早い。

一方、降雨と温度パターンの変化でみても、気候が変わってきていることが明

確に示されており、それによってカンキツ樹の生育に影響が現れていることも明らかになっている。もし、12月の結実期に極端な高温が続くと、多くの果実に生育停止(abort)が起り、減収を招くことになる。果実の生育停止、落果(abortion)は、この時期に40℃以上の高温の日が数日続くことによって引き起こされることが明らかにされている。

極端な高温は単に減収を招くばかりでなく、果実の日焼け等外部と内部の品質にも悪影響を及ぼす。樹冠(樹形構成)の改善や遮光資材の利用といった栽培戦略は、果実を高温傷害から守る上でどうしても発展させなければならない。



### 果樹産業の動向

## 中国におけるオウトウの生産状況 Good Fruit Grower 誌 (2011年5月15日 :www.goodfruit.com)

中国は国土の大きさから、オウトウ生産に本気に取り組んだ場合、米国のオウトウ生産を脅かすことになるかと予想される。1990年代中頃、米国のリンゴ生産者は、中国産の濃縮リンゴジュースが米国市場にあふれ、米国産リンゴジュースやその他加工製品の価格が崩壊した経験から、また、今日まで中国のオウトウ産業に関しては、その規模、栽培品種、生産地、収穫前および収穫後の慣行管理法、あるいは国内消費の実態等について、あまり知られていないことから、中国におけるオウトウの生産や流通の実態を調べるため、米国北西部オウトウ生産者協会とカリフォルニア州オウトウ諮問委員会(California Cherry Advisory Board)は、国際コンサルティング会社 Bryan Christie 社に委託して調査を行った。それによると、中国は依然として米国産オウトウの良好な顧客市場としての地位を保持しており、この状況は米国産オウトウが品質面で優位性を確保し、その輸出量を的確に把握する限り継続できると結論づけている。

### <栽培規模>

中国のオウトウ栽培面積は、約250,000エーカー(10万1千ha)で、今後も面積の拡大が予定されている。生産量の正確な数字は分からないも

の、北京にある米国農業貿易事務所では、最近の生産量を19万5千トン、すなわち20ポンド詰め21,500箱と想定している。

主産地は北京の東に位置する遼寧省と山東省である。主要品種はレッドランタン(Red Lantern)種、ナウェン(Nawen)種、ビッグパープル(Big Purple)種であるが、現在、気象や病害に耐性を有する品種を開発・探索している。

### <収穫前・後の適正管理技術の活用>

園芸学的知見が向上しつつあるものの、進歩的で適正な技術が適用されている例は少ない。おい性台木については現在試験中である。降雨や霜害が障害となっており、特定の地方政府(大連市と撫順市)では生産者支援策として、裂果を回避するための鉄骨製雨よけ施設の設置に1回につき22,000米ドルの助成金を拠出している。加工や選果・荷造り、低温貯蔵といった施設も建設されているものの、選果や荷造りは人手に頼っており、ほとんどの果実が11~22ポンド(5~10kg)入りの発砲スチロール箱で荷造りされている。

### <貯蔵/コールドチェーン>

果実品質の保持については、貯蔵

技術が限られているため、品質の低下は避けられない。輸送トラックには冷却機能がなく、果実を冷やすために貯蔵施設で活用されている唯一の手段は、冷風送風だけである。

### <ほとんどの果実が国内消費>

コールドチェーンのインフラが欠如していることから、中国のオウトウ輸出の可能性は限られている。国内消費仕向けのオウトウ果実のほとんどは北京や上海といった中国北部にある大都市圏で売られており、残りのごく一部が広州に仕向けられている。

中国産のオウトウは、果実品質が劣っていることから、他のアジア諸国において米国産オウトウの競争相手とはなっていない。

### <中国は引き続き米国産オウトウの優位な市場>

ほかの国々と比べて生産量が多いにも関わらず、中国の甘果オウトウ産業は未だ発展途上にある。中国ではオウトウ栽培が継続的に拡大し続けているというものの、産業としては今後5~10年にわたり、中国および中国を取り巻くアジア市場に輸出される米国産オウトウを脅かす競合国とはならないであろう。

## 将来のリンゴ生産および消費の伸びを考慮した長期的輸出戦略

World Apple Report 誌 (2011年4月号)

Belrose 社発行の「World Apple Report (2月号)」誌(当誌1号に掲載)で、今後の世界のリンゴ市場の拡大を考えるにあたってのカギはアジア市場にあるとし、リンゴ産業に携わる企業や業界組織はアジア戦略を考えることが重要であると指摘したものの、世界のリンゴ生産量の大半を占める主要リンゴ生産国42カ国の生産および消費の将来予測を見ると、アジア戦略のみでなく、より広い世界的スケールでの長期的輸出戦略を考えることも必要である。

### ＜予測される厳しい状況＞

Belrose 社の予測によると、今後10年の主要42カ国の生産量は下表に見るように消費の伸びを上回るペースで増大する。欧米を中心とした先進リンゴ生産国の多くは、高齢化の進行、人口増加率の低下あるいは人口減少、競合果実の増加、リンゴ消費の所得効果(所得増によるリンゴ消費増加効果)の低下等から今後、リンゴの消費量が大きく増加することは期待できない。

### ＜増大する中国の影響力＞

この先、中国のリンゴ生産が世界のリンゴ産業のあり方に大きな影響を及ぼすことは確実である。最近の中国の新植面積の大きさや単収の増大傾向から見て、中国は2020年には生産量が4,000万トンに達すると予想される。近年中国の国内リンゴ消費も急速に増大しているとはいえ、既に中国の国民1人当たりの生鮮リンゴ消費量は年間18kgと西欧諸国の平均消費量を上回っている。今後中国での消費増大は頭打ちと考えざるを得ない。中国のリンゴ果汁生産は急激な勢いで拡大を続けたが、その拡大テンポは現在、ほぼ半減している。かつて、世界の生食市場で溢れた供給過剰リンゴは中国のリンゴ果汁生産が大量に吸収してくれると期待する向きもあったが、今後はそれ程期待できないであろう。生食リンゴの需要増大も、中国の国内生産が引き続き拡大していることから、外国からの輸入はかなり抑制的なものに止まる。以上のことから、中国は2020年には世界のリンゴ市場に現在の水準を50万トン上回るリンゴを輸出することになるだろう。

### ＜中国以外の国による供給増＞

中国以外の国々による世界市場への追加的供給力は、2020年には100万トンに達すると見られる。中でもポーランドとチリは、2020年にはそれぞれ20万トンの生食リンゴの供給力を持つだろう。南半球の主要なリンゴ輸出6カ国の国際市場への供給量は、現在より37万3,000トン上回るだろう。

### ＜今後需要拡大が期待できる市場＞

西欧諸国は引き続き生食リンゴの主要市場であり続けるものの、その市場規模の拡大ペースはかなり緩慢になるだろう。これに比べると、東欧諸国や北米市場の拡大の方が期待できる。しかし、今後、最も拡大が期待されるのはロシアとインドである。インドとロシアはともに年間35万トンの生食リンゴ消費量の増大が見込まれるが、これは中国の潜在供給量の増大をほぼ吸収する可能性がある大きさである。トルコとイランもかなりの生食リンゴ消費量の増大が見込まれる。しかしこの2カ国は現在、生食リンゴの輸入を制限しており、今後も大きな状況変化はなさそうで、国内需要は極力国内生産で賄おうとするだろう。

### ＜残された大消費市場＞

先進リンゴ生産国での消費拡大の可能性はあるものの、その量には限りがあり、2020年に現水準を100万トン上回る供給量を吸収する市場を開拓

する必要がある。

世界にはリンゴを生産していない／あるいは僅かしか生産していない国々の人口は25億人に上る。リンゴ産業にとって、僅か0.4kg以下というこれらの国々の年間1人当たりのリンゴ消費量をいかにして引き上げることができるかが課題である。

### ＜非輸出国への影響＞

将来のリンゴ市場を巡るこのような問題は、単にリンゴ輸出国だけの問題ではなく、現在輸出を行っていない生産国にも大きな影響を及ぼすだろう。既存の輸出国は新たな輸出市場、輸出機会を常に探しており、彼らにとってはたとえリンゴ生産国であってもチャンスがあれば輸出攻勢をかけ、そこに食い込もうとするだろう。総じて、主要輸出国のリンゴは品質が高く、彼らは販促技術に長けており、今は昔ながらの地場産リンゴを食べている非輸出国の消費者を引き付けるだけの魅力的な新品種をいくつか備えている。

現在輸出を行っていない国々の生産者も、自国市場への食い込みを狙っている輸出国に対抗して、生産品種の多様化や販売計画の見直しを迫られることになるだろう。そして、国内市場が蚕食されることになれば、現在国内市場しか見えていない非輸出国のリンゴ産業も国内シェアの低下をカバーするために輸出市場の開拓を余儀なくされるだろう。



### 42 主要リンゴ生産国におけるリンゴの需給

(単位: 1000 トン)

年	生産量	輸入量	供給量	国内消費量	輸出量	純輸出量
42カ国						
2010年暫定値	61,293	4,913	66,206	46,662	7,081	2,168
2015年予想	72,157	5,539	77,695	50,317	8,446	2,907
2020年予想	77,822	5,846	83,668	53,224	8,975	3,129
中国						
2010年暫定値	30,000	80	30,080	24,200	1,080	1,000
2015年予想	36,000	100	36,100	25,650	1,450	1,350
2020年予想	40,000	120	40,120	27,520	1,600	1,480
中国を除く国						
2010年暫定値	31,293	4,833	36,126	22,462	6,001	1,168
2015年予想	36,157	5,439	41,595	24,667	6,996	1,557
2020年予想	37,822	5,726	43,548	25,704	7,375	1,649

輸入品に対抗して国内市場での競争力を強化するための最良の途は、輸出に打って出ることである。

今後の10年は、輸出国、非輸出国を問わず全てのリンゴ生産者にとってより激しい競争時代となることは間違

いない。このような状況の下で勝ち抜くためには、生産性向上のための生産投資、貯蔵・選果・荷造り施設の改良投資、販売技術の革新が不可欠である。

## 世界のリンゴ、ブドウおよびナシの需給

米農務省海外農業局 HP (2011年6月16日)

### 1 リンゴ

#### <生産量・貿易量ともに上方修正>

2010/11年の世界生産量の見込みは、中国とチリにおいて記録的生産量が期待されていることから、12月の予測(「海外果樹農業ニュース111号」に掲載)から4%上方修正されて6,190万トンとなっている。世界の輸出量の見込みは、主としてメキシコ、カナダ、インドネシアおよびサウジアラビアからの需要が予想より強まったことから、7%上がって520万トンとなっている。米国の生産量の見込みは相対的に変化がない一方、輸出量は増えている。

#### <2010/11年度の修正点ハイライト>

○ 中国の生産量の見込みは、主要生産省において気象条件が良好であったことから、10%上方修正されて過去最高の3,300万トンとなっている。国内消費の伸びにより輸出が減って、生産量の増加分を吸収すると期待されている。

○ EUの輸出量は、生産量が少ないにもかかわらず、ロシアからの需要が大きくなることにより12%増加して120万トンとなっている。国内消費を犠牲にして輸出することの方が利益を生むと期待されている。

○ チリの生産量の見込みは、生産条件が予想よりも良かったため15%上方修正されて150万トンとなっている。輸出量は、生産量の増加とEU、コロンビアおよびサウジアラビア等の主要市場からの需要増加によって約20%増加して84万トンとなっている。

○ 米国の輸出量は、メキシコとのトラック輸送問題に関連して2010年に20%の報復関税が課されたにもかかわらず、メキシコ、香港およびインドからの需要が予想より強かったため、8%増加して過去最高の81万トンになると見込まれている。米国の輸入量は国内供給量が十分であったため5%減少して18万トンとなった。

○ アルゼンチンの輸出量は、生産量が

少ないにもかかわらず、EU、ブラジルおよびロシア等の最大市場からの需要が増大したことから、10%増加して23万トンと見込まれている。輸出量が増加すると予想される一方で、国内消費量は減少すると予測されている。

### 2 ブドウ

#### <記録的生産量；貿易量は安定的>

世界の生産量の見込みは、12月に予測した1,590万トンという記録的な数字とほとんど変化がない。世界の輸出量の見込みは、香港およびインドネシアからの需要の増大によって2%増加して240万トンとなっている。米国の生産量および輸出量は多い。

#### <2010/11年度の修正点ハイライト>

○ チリの生産量は、不安定な生産条件にもかかわらず、4%増加して過去最高の120万トンとなっている。輸出量は、EUのオフシーズン果実に対する需要増大によって3%増加して83万5千トンとなっている。

○ 米国の生産量は、生鮮用として販売されるレーズン用ブドウが増加した結果、7%上方修正されて87万5千トンとなっている。輸出量は、香港からの強い需要およびインドネシアへの記録的な輸出量によって9%増加して32万6千トンに達した。さらに、メキシコへの輸出量は、トラック問題に対する報復関税が当初の45%から2010年には20%へ引き下げられたため回復しつつある。米国の輸入量は、豊富な国内供給量に影響されたため58万トンで終わった。

○ 南アフリカの輸出量は、生産量が少なくとランド(南アフリカの通貨単位)高もあって、EUからの需要が弱いことから10%減少して23万5千トンとなった。

### 3 ナシ

#### <生産量は増加；貿易量はやや増加>

世界の生産量の見込みは、中国およびチリにおける生産量が予想より多

くなったことから11%上方修正されて記録的な2,060万トンとなった。世界の輸出量の見込みは、ブラジル、インドネシアおよびマレーシアからの輸入需要が拡大したことから3%増加して170万トンとなった。米国の生産量および輸出量は下方修正された。

#### <2010/11年度の修正点のハイライト>

○ 中国の生産量の見込みは、主要生産省において気象条件が良好であったことから、15%増加して記録的な1,500万トンとなっている。

○ 米国の生産量の見込みは、主要な生産州における冷涼で湿潤な気象条件のために5%減少して73万2千トンとなっている。輸出量は、生産量が少ないことおよびカナダ、ブラジルおよびメキシコ(20%の報復関税も一部理由となって)からの需要が弱いことから3%下方修正されて14万6千トンとなっている。

○ チリの生産量の見込みは、良好な生産条件の結果、12%増加して記録的な28万2千トンとなっている。輸出量は、生産量が多いこととEUおよび米国からのオフシーズン果実に対する強い需要の結果、17%上方修正されて12万9千トンとなっている。

○ ブラジルの輸入量は、生産量が少ないことおよびアルゼンチン産果実に対する需要が高い結果、7%上方修正されて16万トンとなっている。

○ インドネシアの輸入量は、中国産に対する強い需要によって25%上昇して記録的な11万5千トンとなっている。

○ マレーシアの輸入量は、南アフリカ産および韓国産果実に対する強い需要によって23%増加して4万3千トンとなっている。

(注) 上記に記述がある国でも紙面の都合上、次頁の表に記載されていない国があります。

## リンゴの需給

(単位:トン)

国名	販売年度	生産量	輸入量	輸出量	国内消費量	
					生鮮	加工
アルゼンチン	2007/08	980,000	750	235,820	394,930	350,000
	2008/09	933,000	1,375	207,195	256,180	471,000
	2009/10	830,000	2,396	178,825	273,571	380,000
	2010/11	970,000	1,000	230,000	281,000	460,000
ブラジル	2007/08	1,121,290	55,050	112,250	897,281	166,809
	2008/09	1,220,499	61,343	98,265	934,999	248,578
	2009/10	1,275,852	76,878	90,839	1,076,891	185,000
	2010/11	1,200,000	82,000	70,000	1,052,000	160,000
チリ	2007/08	1,350,000	80	775,910	149,800	424,370
	2008/09	1,280,000	146	678,637	181,509	420,000
	2009/10	1,370,000	245	842,599	185,146	342,500
	2010/11	1,506,000	250	840,000	194,290	471,960
中国	2007/08	24,800,000	39,781	1,021,462	16,058,319	7,760,000
	2008/09	29,800,000	48,487	1,173,259	23,875,228	4,800,000
	2009/10	31,680,788	61,315	1,201,253	24,940,850	5,600,000
	2010/11	33,000,000	65,000	1,080,000	27,185,000	4,800,000
EU-27	2007/08	10,294,980	882,602	750,085	7,996,721	2,430,776
	2008/09	12,655,304	780,118	1,202,521	8,295,718	3,937,183
	2009/10	12,210,516	593,693	1,216,934	8,197,755	3,389,520
	2010/11	10,684,800	710,000	1,200,000	7,467,800	2,727,000
香港	2007/08	0	98,700	0	98,700	0
	2008/09	0	120,700	0	120,700	0
	2009/10	0	123,162	0	123,162	0
	2010/11	0	135,000	0	135,000	0
インド	2007/08	2,001,000	59,806	33,005	2,027,801	0
	2008/09	1,985,000	73,599	44,066	2,014,533	0
	2009/10	1,935,000	130,332	28,062	2,037,270	0
	2010/11	1,936,000	84,086	37,000	1,983,086	0
インドネシア	2007/08	0	143,322	0	143,322	0
	2008/09	0	151,386	0	151,386	0
	2009/10	0	158,925	0	158,925	0
	2010/11	0	190,000	0	190,000	0
カナダ	2007/08	446,364	166,627	49,661	391,460	171,870
	2008/09	426,858	173,393	30,373	416,138	153,740
	2009/10	413,096	184,128	21,266	435,768	140,190
	2010/11	405,000	195,000	20,000	440,000	140,000
ロシア	2007/08	1,300,000	939,946	3,824	1,365,122	871,000
	2008/09	1,115,000	1,146,909	2,687	1,352,222	907,000
	2009/10	1,230,000	1,120,050	4,621	1,434,929	910,500
	2010/11	1,000,000	1,140,000	4,500	1,315,000	820,500
サウジアラビア	2007/08	0	130,000	0	130,000	0
	2008/09	0	126,000	0	126,000	0
	2009/10	0	155,000	0	155,000	0
	2010/11	0	148,000	0	148,000	0
南アフリカ	2007/08	748,699	95	358,555	181,239	209,000
	2008/09	747,000	235	338,971	147,073	261,191
	2009/10	780,686	200	307,492	239,786	233,608
	2010/11	800,000	300	312,000	251,300	237,000
台湾	2007/08	5,953	134,394	0	140,347	0
	2008/09	4,163	128,899	0	133,062	0
	2009/10	3,760	127,151	0	130,911	0
	2010/11	4,300	135,000	0	139,300	0
タイ	2007/08	0	87,500	0	87,500	0
	2008/09	0	120,900	0	120,900	0
	2009/10	0	130,888	0	130,888	0
	2010/11	0	119,000	0	119,000	0
メキシコ	2007/08	505,000	196,953	305	576,648	125,000
	2008/09	511,988	222,655	285	612,358	122,000
	2009/10	561,492	216,214	266	677,440	100,000
	2010/11	540,000	220,000	260	664,740	95,000
ウクライナ	2007/08	707,000	111,093	27,175	790,918	0
	2008/09	719,000	265,298	41,759	942,539	0
	2009/10	853,000	264,717	93,993	1,023,724	0
	2010/11	896,000	170,000	80,000	986,000	0

## リンゴ続き

(単位:トン)

国名	販売年度	生産量	輸入量	輸出量	国内消費量	
					生鮮	加工
UAE	2007/08	0	120,000	0	120,000	0
	2008/09	0	155,000	0	155,000	0
	2009/10	0	168,000	0	168,000	0
	2010/11	0	144,000	0	144,000	0
米国	2007/08	4,102,967	172,887	673,176	2,256,357	1,346,321
	2008/09	4,327,180	165,004	801,755	2,209,072	1,481,357
	2009/10	4,287,898	182,259	768,490	2,277,735	1,423,932
	2010/11	4,175,497	180,000	810,000	2,150,096	1,395,401
ベトナム	2007/08	0	70,000	0	70,000	0
	2008/09	0	154,000	0	154,000	0
	2009/10	0	166,000	0	166,000	0
	2010/11	0	115,000	0	115,000	0
合計	2007/08	53,172,557	4,311,814	4,566,048	38,654,477	14,263,846
	2008/09	60,745,328	4,903,572	5,136,234	47,331,925	13,180,741
	2009/10	62,571,158	4,951,798	5,313,939	49,133,767	13,075,250
	2010/11	61,852,452	4,817,786	5,248,360	49,725,017	11,696,861

## ブドウの需給

(単位:トン)

国名	販売年度	生産量	輸入量	輸出量	国内消費量	
					生鮮	加工
インドネシア	2007/08	0	27,125	0	27,125	0
	2008/09	0	27,852	0	27,852	0
	2009/10	0	34,775	0	34,775	0
	2010/11	0	42,000	0	42,000	0
チリ	2007/08	1,185,000	264	836,860	348,404	0
	2008/09	1,205,000	292	850,390	354,902	0
	2009/10	1,105,000	282	781,303	323,979	0
	2010/11	1,215,000	250	835,000	380,250	0
中国	2007/08	4,646,814	46,500	54,300	4,639,014	0
	2008/09	4,953,000	80,100	63,200	4,969,900	0
	2009/10	5,674,612	78,169	102,041	5,650,740	0
	2010/11	6,200,000	75,000	89,000	6,186,000	0
EU-27	2007/08	1,977,000	644,449	136,024	2,485,425	0
	2008/09	1,988,360	640,181	161,550	2,466,991	0
	2009/10	2,005,786	565,510	114,249	2,457,047	0
	2010/11	1,892,782	590,000	135,000	2,347,782	0
香港	2007/08	60,000	81,000	49,500	91,500	0
	2008/09	90,000	121,570	82,720	128,850	0
	2009/10	90,000	114,635	81,714	122,921	0
	2010/11	90,000	116,000	89,000	117,000	0
インド	2007/08	1,005,000	3,021	118,391	889,630	0
	2008/09	1,005,500	2,490	109,332	898,658	0
	2009/10	1,006,000	2,576	129,778	878,798	0
	2010/11	1,006,000	3,500	119,000	890,500	0
ロシア連邦	2007/08	40,000	407,910	625	446,285	1,000
	2008/09	28,000	397,600	800	422,800	2,000
	2009/10	32,000	385,460	522	414,938	2,000
	2010/11	29,500	400,000	400	427,100	2,000
南アフリカ	2007/08	263,000	1,501	262,573	1,928	0
	2008/09	272,000	1,981	271,229	2,752	0
	2009/10	277,294	2,209	259,836	19,667	0
	2010/11	250,000	2,200	235,000	17,200	0
米国	2007/08	834,909	569,300	300,914	1,103,295	0
	2008/09	893,758	625,616	336,043	1,183,331	0
	2009/10	851,856	558,284	300,346	1,109,794	0
	2010/11	875,533	580,062	326,200	1,129,395	0
合計	2007/08	14,298,675	2,188,046	2,304,875	14,180,846	1,000
	2008/09	14,643,109	2,298,958	2,409,852	14,530,215	2,000
	2009/10	15,545,888	2,079,316	2,229,492	15,393,712	2,000
	2010/11	15,941,865	2,182,862	2,390,898	15,731,829	2,000

ナシの需給

(単位:トン)

国名	販売年度	生産量	輸入量	輸出量	国内消費量	
					生鮮	加工
アルゼンチン	2007/08	720,000	45	465,110	79,935	175,000
	2008/09	780,000	103	454,176	85,927	240,000
	2009/10	650,000	193	418,116	62,077	170,000
	2010/11	800,000	100	460,000	100,100	240,000
ブラジル	2007/08	18,300	139,888	66	158,122	0
	2008/09	17,100	161,964	0	179,064	0
	2009/10	18,300	189,884	0	208,184	0
	2010/11	18,200	160,000	0	178,200	0
中国	2007/08	12,895,000	14	423,268	11,521,746	950,000
	2008/09	13,538,142	9	445,558	12,062,593	1,030,000
	2009/10	14,262,979	13	469,985	12,690,907	1,102,100
	2010/11	15,000,000	10	430,000	13,450,010	1,120,000
EU-27	2007/08	2,784,137	351,603	275,526	2,549,317	310,897
	2008/09	2,379,300	393,569	224,311	2,329,498	219,060
	2009/10	2,753,660	279,306	311,758	2,396,148	325,060
	2010/11	2,304,700	325,000	300,000	2,165,567	164,133
ロシア連邦	2007/08	190,000	397,487	2,474	450,013	135,000
	2008/09	180,000	316,487	2,335	425,152	69,000
	2009/10	185,000	380,678	1,367	489,711	69,600
	2010/11	172,000	370,000	1,500	472,000	68,500
米国	2007/08	790,942	85,838	161,563	425,004	290,213
	2008/09	788,248	83,908	150,144	431,708	290,304
	2009/10	867,120	62,735	164,057	446,464	319,334
	2010/11	732,461	80,000	146,000	389,130	277,331
合計	2007/08	18,908,937	1,592,696	1,656,194	16,736,735	2,108,704
	2008/09	19,218,264	1,565,326	1,628,139	17,066,737	2,088,714
	2009/10	20,289,645	1,599,015	1,705,413	17,950,840	2,232,407
	2010/11	20,556,351	1,584,055	1,682,180	18,353,262	2,104,964

(財)中央果実基金

(財)中央果実生産出荷安定基金協会

住所

〒107-0052  
東京都港区赤坂 1-9-13  
三会堂ビル 2階

電話 (03)3586-1381  
FAX (03)5570-1852

お知らせ

第1号のニュースレターの中で「読者アンケート」をお願いしましたが、まだ回答されていない方は、ご多忙中のところ大変恐縮ですが、今後の編集の参考とさせていただきますので、ご返送よろしくお願いいたします。  
また、読者の皆様からの積極的なご要望も歓迎しますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

□□□□□□□□□□□□□□

毎日くだもの200グラム運動メールマガジン「くだもの&健康ニュース」を創刊します。

多くの方の読者登録をお待ちしております。  
メルマガの読者登録方法とサンプルは当協会ホームページをご覧ください (<http://www.kudamono200.or.jp/JFF/>)。



毎日くだもの200グラム運動

本誌の翻訳責任は、(財)中央果実生産出荷安定基金協会にあり、翻訳の正確さに関して Washington State Fruit Commission (Good Fruit Grower) および Belrose 社 (The World Apple Report) の各社は、一切の責任を負いません。

トピックス

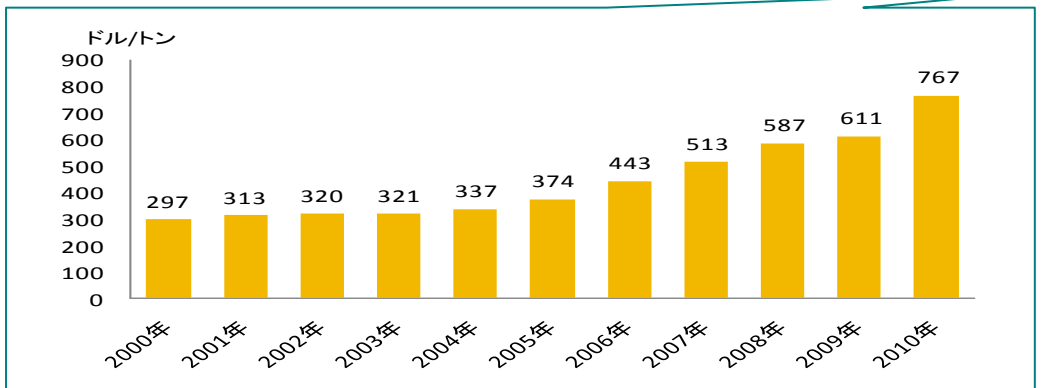
中国の2000~2010年までのリンゴの年間平均輸出価格

World Apple Report 誌 (2011年4月号)

中国は最近、かつての世界の生食リンゴ市場への低価格品供給者というイメージを急速に払拭しつつある。下のグラフは2000~2010年の毎年8~12月(中国産生食リンゴの輸出最盛期)の平均生食リンゴ輸出価格の推移を見たものである。

2000年から2004年の8~12月の中国産生食リンゴの1トン当たりの輸出価格は297~337ドルで、平均317.60ドル(6.35ドル/箱(20kg))であった。次いで2005年以降平均輸出価格は急速に上昇し、2009年には2000~2004年の平均価格の約2倍となっている。2010/11年度の当初5ヵ月には平均価格はさらに上昇し、2009

年の平均価格(611ドル/トン)を25.5%上回る767ドル/トン(15.34ドル/箱)となっている。2004年以降の中国人民元相場の引き上げにより米ドルベースでの平均輸出価格は25%引き上げられたことになるが、残り115%の価格上昇は中国国内事情によるものといえる。具体的には、中国でのインフレの進行、国内需要の増加、生産・選果・販売コストの上昇等々である。もし中国による低価格生食リンゴの輸出の時代が終わりを迎えつつあるとすれば、中国産との激しい競争に直面してきた主要生産国や主要生食リンゴ消費市場は、大きな影響を受けることになるだろう。



本誌についてのご質問、お気付きの点などがある場合、または他に転載する場合には、左記上に一報くださるようお願いいたします。許可なくしての転載および複製(コピー)は著作権の侵害となることがありますのでご注意ください。